現代青年期女性における適応的な自立についての一考察

An exploratory research in adaptive independence in adolescent women of today

遠藤 愛里
Airi Endo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：青年期女性，精神的自立，ロールシャッハ法，イメージカード選択
Key words：Adolescent women, Mental independence, Rorschach technique, Image cards

１．研究目的

近年，女性の社会進出や「イエ制度」からの脱却といった社会の変容にともない，家族形態や養育環境も多様化が進んでいる．母親の在り方が個別化・多様化することにより，娘たちは従来に比べて，より多種多様な母娘関係の中で育まれてきたといえよう．青年期を迎えた娘たちが将来選択を行う際，「母親」をモデルとして参考にする例は散見されるが（竹田ら，2015；鈴木ら，2021），多様化が進んだ現代においてはかつてのような固定化された道筋は見えず，相対化した価値観の中で己を模索するプロセスを歩んでいるものと想定される．では実際のところ彼女たちは何を心のよりどころとしながら，そしてまたどのように精神的自立を果たし，それぞれに自己確立を目指すのだろうか．先行研究を概観すると，「父娘関係および娘の父親イメージ」にまつわる研究（菊池，2019ほか）はなされているのに対し，「母娘関係および娘の母親イメージ」に焦点を当てた研究は，筆者の管見の限り見当たらなかった．

以上について検討するために，本研究の研究Ⅰでは水本（2011）の尺度を用い現代青年期女性の母娘関係及び精神的自立の程度を調査する．さらに研究Ⅱでは，投映法（ロールシャッハ法）を用いて「母親像」の展開を中心に質的に見ていく．これらの調査により，青年期女性が母親との関係性を前提とした自らの成長過程について意識的な部分のみならず，言語化がやや困難な部分についても示唆が得られることを期待している．

２．研究実施内容

２－１．方法

＜研究Ⅰ＞

【調査対象】大学に通っている成人女性 181 名．

【実施方法】授業時間外の本学内のラウンジ等の開放スペースで実施した．調査依頼及び研究説明は直接筆者が行い，同意を得たうえで個別自記式質問紙法を実施した．

【調査項目】母子関係における精神的自立尺度（水本ら，2011）（11 項目）（5 件法），フェイスシート（家族について，同居別居，学年，年齢，所属．）

＜研究Ⅱ＞

【調査対象者】研究Ⅰに参加した人のうち「自立型」3 名，「密着型」2 名の計 5 名を対象とした．

【実施方法】大学キャンパス内にある面接室にて実施した．筆者よりメールにて研究Ⅱの調査依頼を行い，調査当日は筆者が個別にロールシャッハ法の施行と，母親に関するインタビューを行った．調査内容は録音し，その内容は逐語化した．

【調査項目】片口法によるロ法（片口，1987），母親に関するインタビュー（自己評価，思い出，認知の変化，被影響感）．

２－２．結果と考察

本研究によって明らかになったのは以下の 6 点である．

①現代の母娘関係の実態として，生活形態の違い（母親と同居しているのか否か・一人暮らしか否か）によって娘の精神的自立の程度の違いに差は見られず，母親が物理的に不在の環境下でも精神的自立が支えられている可能性が示唆された．

②各群の人数比を見ると，依然として「密着群」群は多い傾向があったが，ここ 10 年内で「自立型」

が増加傾向にある可能性が示唆された．
③現代の青年期女性は，従来より母親らしさ（濃淡の柔らかさ・優しさ）をもつとされる「母親カード」（VIIカード）に対して濃淡をみる傾向はほとんどなく，また母親イメージカード（MIC）として選択されることもなかった．この点から，古くより想定されていた柔らかく優しげな母親イメージから，現代青年期女性が思い描く母親イメージが離れている実態が見受けられた．
④現代青年期女性が抱く母親イメージを調べるため，調査対象者らがそれぞれ選択した MIC 選択の内容及び選択理由の語りを検討した．「自立型」「密着型」における母親イメージの共通点として，明るく情緒表現が豊かで社会的にオープンな母親像との良好な関係性が浮き彫りとなった．
⑤「自立型」「密着型」における母親イメージの相違点としては，主に後者において母親像が未分化で曖昧であり，分化のプロセスが現在進行中であることが示された．
⑥「自立型」「密着型」における自己イメージの相違点として，前者は自分自身の様々な特徴をしっかりと自覚しており，その複雑性を受け入れ，統合しうる自我の強さを有しているのに対し，後者においてはその複雑性は容易には受け入れがたく，統合の困難さが見受けられた．また前者においては“自分”をはっきりと認識し“自分”を基準とした迷いのない態度が明確であるが，後者においては“自分”は未だ曖昧で，幼さへのこだわりや無力感・不全感を伴い，選択の決断が難しいといった態度が浮き彫りとなった．

これらの結果に基づき，「密着型」から「自立型」，すなわち適応的自立へと至るために達成が求められる通過点は，①自己像について，ネガティブな側面もポジティブな側面も含め自覚があり，十分に語れるようになること，②父親像と母親像がきちんと分化されており，表現に時間がかからないこと，③母親像において個別性・独自性が高いこと，④自分自身が抱える課題を自覚し，対処できるようになること，⑤未熟性へのこだわりが見られないことの 5 つが挙げられた．

３．まとめと今後の課題

本研究の知見からは，現代の母娘の在り方を捉え娘たちの心の中にある拠り所がどのようなイメージであるのか，また精神的自立の道に歩んでいくために必要な要素が何であるのかの示唆が得られた．そして，現代における母親イメージは，従来の普遍的な母親とは大きく離れ，独自性が豊かでかつ多くの役割を担う社会に開かれた存在として認識されていることが示された．なお，母親との関係が良好な場合には，母親特有の個別性・複雑性を肯定的に捉えている傾向が示唆され，これらの見解は母娘の問題を扱うことの多い心理臨床の現場にも役立つ知見であると考えられた．

今後の課題としては，調査対象の範囲を今回のように女子大学に通う女子大学生に限定せず，男女共学の大学に通う女子大学生のほか，同年代の社会人女性へと広げることにより，現代青年期女性の傾向についての知見を明確化する必要性が挙げられる．また研究Ⅱでは，新型コロナ感染症の影響により調査対象者の数を十分に確保することが難しかったため，今後は声掛けの範囲を広げるほか，オンラインでの実施を工夫するなど，調査対象者の確保を努め，より多くの方を対象とすることで，より普遍的な母親イメージおよび自己イメージのさらなる検討を重ねていく必要があると考えられる．

付記

本研究は，令和 4 年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：03-034, 03-035）．また，大妻女子大学人間生活文化研究所令和 4 年度大学院生研究助成(B)（課題番号：DB2203）より研究助成を受け行った．

主要参考文献

[1] 水本深喜・山根律子（2011）．青年期から成人期への移行期における母娘関係―「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討―　教育心理学研究，59 (4)，462-473.
[2] 片口安史（1987）．新・心理診断法：ロールシャッハ・テストの解説と研究．金子書房.
[3] 菊池由香里（2019）．青年期女性における父娘関係および父親イメージに関する質的研究 ―4 類型の父娘関係と「精神的自立」に着目して―　創価大学大学院紀要，40, 189-213.